

東西宗教交流学会年次報告

二〇二二年・第四〇回學術大会

宗教と戦争

東西宗教研究

No. 21・2023

東西宗教交流学会年次報告

二〇二三年・第四〇回学術大会

目次

宗教と戦争

■ 発表 I

一 仏教僧のウクライナ体験

してきた遊行僧の祈りの視点から 寺沢潤世 3

■ 発表 II

戦争と平和の基盤としての個人 峯岸正典 13

■ 発表 III

教皇フランシスコ『ラウダート・シ』における

インテグラル・エコロジーと戦争 角田佑一 28

編集後記 44

一仏教僧のウクライナ体験

ポストソ連世界を行脚してきた遊行僧の祈りの視点から

寺沢潤世

本日の宗教対話の会議にお招きいただきました日本山妙法寺の寺沢潤世です。今話をしていくところは、戦争の渦中にある、ウクライナの西のカルパティア山脈山中に準備した道場からご挨拶させていただきます。今、ウクライナの戦争はロシアの侵攻による国家危急存亡に直面し、既に一年以上抵抗し続けて今日に至っています。ウクライナの戦争が今後どういう形で終結するのか、まだ予測を許しません。今の時期はその最も重大な山場にさしかかっていると思います。この戦争がどうかたちで終結しうるかという問題は、即これからの人類の未来の運命を決する、瀬戸際にあると言っても過言ではありません。私どもは五

年以上前に、この深い山中に、ウクライナとヨーロッパの平和を祈る道場を準備いたしました。既に五年前、ウクライナの危機は、国家の存亡の軍事的な侵攻の危機を迎える可能性がありました。国においての存亡の危機は、自然災害や諸々の災害のほかに、古来の宗旨では、「自界叛逆難」、もう一つは「他国侵逼難」という戦争、これが国家の存亡に関わる最大の難だと捉えています。ウクライナがそういう大難に直面することを事前に憂い、この山中に道場を構えました。我々の宗旨である「立正安国」という平和の法華経の祈りをもって、国土全体の平和と安穩を祈るという目的で、この道場を準備致しました。昨年、戦争が

始まる以前からウクライナに入り、戦争回避の祈りをキエフで務めると共に、ロシア軍の侵略が開始されたその時点で、私たちはこの山中に場所を移して、今日に至るまで平和の祈りを続けています。

私がウクライナに入ったのは、まだソ連時代のことでした。最初に入ったのはモスクワです。当時一九八八年、ソ連のゴルバチョフ大統領とアメリカのレーガン大統領が、モスクワにて米ソ首脳会談を開催するその時期に合わせ、私は初めてモスクワ入りを果たしました。ソ連の歴史上初めて赤の広場にて、日本の唐招提寺に伝来された鑑真和尚が招来されたお仏舎利の一部を、当時の唐招提寺、森本孝順長老猊下からお預かりして、世界巡礼の行脚に立ち、モスクワに入りました。そしてソ連の共産党本部の特別の正式な許可を頂いて、クレムリン宮殿の前、赤の広場にお仏舎利をお祀りして、レーガン・ゴルバチョフ首脳会談の真っ最中、お祈りを務めました。それはソ連が始まって以来、初めて正式に宗教者として、赤の広場で平和の祈

りをする事が許されるきっかけになりました。それ以降、冷戦終結、ソ連崩壊、その後の大混乱の中で、これからの世界はどうあるべきかというビジョンは、真摯に追求されることなく、世界の国際秩序のあり方の根幹を揺るがす大事件が立て続けに起きていきました。そのなかで、一つ一つ大きなきっかけが誤った方向にのみ決断されていきました。そのなかで冷戦終結後の今日、ウクライナの戦争によって、人類は最も大きな岐路に立ちかかっていると云っても過言ではありません。すなわち冷戦終結後の世界、ソ連崩壊後の新しい国づくり、そしてその間、湾岸戦争、チェチェン戦争、9・11後のテロに対する戦争。さらにイラクの第一次イラク戦争、さらにテロを撲滅する戦争という名のもとでロシアにおいては第二次のチェチェン戦争、その後、アラブの春と言われる変革運動は、ことごとく軍事力によって押さえ込まれてきました。そして今日のウクライナ戦争に至ったわけです。当時初めてソ連入りした頃、ゴルバチョフ大統領が冷戦終結に至るために、どういう理念と時

代精神のもとで、誰もが予想できなかった政治変革を実行していったのかを、今日もう一度振り返る必要があります。

私はソ連に入る前、一九七〇年代からヨーロッパで修行を務めていました。一九七〇、一九八〇、一九九〇年代、私がヨーロッパに入った当時は、冷戦の最高潮の時代で、新しい核ミサイルを東西ヨーロッパが配備するという緊張感のもとで、核戦争の危機が叫ばれていました。当時のヨーロッパでは、一時停滞していた反核・反戦・非暴力の一般市民の平和運動が大きく盛り上がりつつあった時期でした。私事で恐縮ですが、思い浮かべるのは、初めて一九七五年私が二五歳の時にイギリスに入った頃の平和運動の行くえです。当時無一文、乞食同様の生活をしながら、ロンドンで修行を務めていました。最初の拠点が北ロンドンのハイゲート・セメトリーという古い墓場の近くです。そのハイゲート・セメトリーという墓場の中にカール・マルクスのお墓があります。そのカール・マルクスのお墓のすぐ近くに、小さな草庵を準備して、イギリス、ヨーロッパの平和を祈

る行脚を続けました。

イギリスで行進を始めた時、当時のイギリスの多様な宗教、教会の方々が一緒になって行進をいたしました。そういう積み重ねの中で、やがて大きな国民的な非暴力平和運動として、イギリスのみならず全欧州に展開されました。その運動はあらゆる宗教者、キリスト教の様々な教会が、何のわだかまりもなく、クエーカー、カトリック、メソジスト、英国国教会の方々も一緒になって、ヨーロッパが核戦争の危機を回避して、東西分断のヨーロッパの壁を乗り越えて、核戦争の危機を人類から取り除いていこうという確固とした理念のもとでおこなわれました。非暴力の行動による、抵抗運動、直接行動、平和行進、大集会が展開されました。その大きなうねりというものが、最終的にヨーロッパの共産圏の市民の人たちにも動かし、東ヨーロッパの共産圏の国々の教会、市民が立ち上がっていく。そういう形で最後は、非暴力の市民の力で、一国一国が自らの未来と運命を、その国の人々が決定していくことにな

りました。そういう方針を大きく取り込んだのがソ連のゴルバチョフ大統領でありました。

その時代精神というのが、ついに非暴力によってベルリンの壁を崩壊させ、非暴力によって共産国東ヨーロッパの国々が、自分たちの国のあり方を、自分たちの国の将来を自ら決定していく。ソ連のゴルバチョフ大統領は、軍事力を動かさないうで、それぞれの国の民衆が立ち上がった中で起きた国家変革の運動を、そのまま認めていきました。そこに二〇世紀の後半において、誰もが予想できなかったベルリンの壁の崩壊、東ヨーロッパ共産国家の解放、さらに東西ドイツの統一、さらにワルシャワ軍事同盟の解消、そして東西ヨーロッパの融合という大きな世界変革の潮流が生まれていったわけであります。

私はベルリンの壁が崩壊する七年前一九八三年において、まだ冷戦対決が最高潮の時に、一人でポーランドに入り、ワルシャワからベルリンの壁まで行脚したことがあります。その目的はその行路が示すように、分断のヨーロッパ

の壁を乗り越えていく、冷戦構造の根幹を変えていくお祈りを、ポーランドから始めました。たった一人の日本の僧です。何の準備もなく、ワルシャワから、てくてくベルリンに向けて歩き始めました。そうしたところ、小さな村でも、大きな町でも、その村のその町の教会が、扉を開けて私を受け入れてくれました。各地にある神学校の神学生たちが大歓迎をして、私のために集会を開いてくれました。その場で一宿一飯のお慈悲を賜り、ポーランドの人たちの暖かい支援のもとで、全行程をベルリンの壁まで行脚することができました。

当時のポーランドは戒厳令の下で、当時有名なワレサさんの率いるソルダルノツシユ *Solidarność* 連帯という組合の運動が禁止されて地下に潜行している緊張の時期でした。その中で私一人、言葉も分らずに歩いていました。田舎の町々の教会の扉を叩いて、本当に心から歓迎と支援をいただき、ベルリンの壁にまでいきました。その時に東ヨーロッパ、特にポーランドの体験を通じて、イデオロ

ギームも宗教・宗派も超えたところで、人類が核の戦争から生き延びる祈りは、万人の祈りとなって通じていったことを、自ら体験しました。それは私一人のささやかな体験ですが、その力こそがベルリンの壁を崩壊させ、東ヨーロッパの共産・独裁の国家を、民衆自らがその国を作り替えていく原動力の本質となったと思います。

もう一つ私の個人的な体験ですが、イギリスに初めて入って五年後、ヨーロッパ、イギリスの平和運動の人たちと一緒にあって、イギリス、ヨーロッパで初めて、世界平和を祈るお仏舎利塔が完成しました。それはイギリスのミルトン・ケインズという新しい新都市計画の画竜点睛と言いますか、最後の仕上げとして、日本から来た仏教の平和のシンボルとしてのお仏舎利塔を新都市の目玉の計画として正式に採用され完成されたという経緯があります。詳しいことは申し上げませんが、その落慶法要がございます。当時、その初めて建立されたお仏舎利塔の落慶法要に、イギリスのありとあらゆる宗教・宗派が集まりました。英国国

教会を始め、メソジスト、クエーカー、それからそういう各教会を背景とする様々な平和運動の流れがございます。パックス・クリステイ、ピースブリッジ・ミレニオンの方々のみならず、当時ヨーロッパに伝わってきたハリークリシュナやシーク教徒、それからバハイ教徒、回教徒、ゾロアスター教徒がみんな一同に集まりました。同時にヨーロッパからアメリカに移住していつて今日のアメリカが作り上げられていったその時に、迫害され続けていった、当時のネイティブアメリカンの十部族の代表の方々も、初めてのヨーロッパの仏舎利塔に、アメリカから参席して、お仏舎利塔の前でネイティブアメリカンのピースパイプのお祈り、平和のお祈りを、涙を流しながら祈ってくださいました。

これは当時、近代国家日本が明治維新以来、イギリス、ヨーロッパから近代国家の経営を学びとるとともに、第二次大戦では日英は敵対する戦争の中にありました。そしてたくさん英国軍の捕虜が日本軍によって虐待されたとい

う歴史は、イギリスの中では忘れられないものとして記憶されています。その中で、日本の、そして他宗教の仏教の、私たちの祈りをそのまま彼らの祈りとして賛同する全イギリスの宗教界があります。そして共に人類絶滅の核戦争を、冷戦を乗り越えていこうという私たちの祈りが、みんなの祈りとなって共感され、ヨーロッパで初のお仏舍利塔の祝いが務められました。それは本当の意味での東西文明の和解であり、融合の姿ではなかったか。ヨーロッパ白人文明によって迫害されたアメリカ原住民のネイティブアメリカンの人たちが、ヨーロッパで平和のために、アメリカからわざわざ来て伝統的なネイティブアメリカンの平和の祈りを捧げてくれました。それもまたヨーロッパ文明のアメリカにおける原罪というものが贖罪され和解されて、新しい全人類が一つの平和の祈りを作ろうとする発端の姿がヨーロッパの中で実現したのではないか、今にして私はその思いを深くするわけです。

そういう流れの中で冷戦終結があり、ベルリンの壁の崩

壊があり、ヨーロッパの融合があったという、その不思議な一般民衆の非暴力の平和の祈りというものの力は、最後にソ連のモスクワにまで到達するわけです。初めてモスクワに入りまして、米ソ首脳会談の最中、赤の広場で正式な許可を得て平和のお祈りをし、クレムリンからお招きを受けました。当時のゴルバチョフ大統領へ、唐招提寺からお預かりした鑑真和上由来のお仏舍利を、大統領の手に直々お渡し、新しい理念の世界創造の試みが成就できる祈りを、ゴルバチョフ氏にお届けする機会をいただきました。最終的にはその鑑真和上のお仏舍利は、そのままベルリンの壁にも行き、東西ドイツ分断、人類に初めて原爆を投下するトルーマンの決定をしたボツダム会談の会場にもそのお仏舍利を迎えて、最終的にはニューヨークの国連軍縮特別総会の会場にこのお仏舍利をご安置することができました。

それが一九八八年ほとんど期を同じくしてヨーロッパの大変革があったと同時に、一九九一年一月一五日に湾岸戦争が勃発いたしました。それはサダム・フセイン大統領が

クウェートに軍事侵攻したことに對する国際社会の、これは懲罰という軍事行動でありました。その時から世界変革のために一人一人の市民が、自らの運命を選んで新しい世界変革と創造の根幹に非戦・非武装・非暴力という新しい価値観によって、全人類が統合されようとしていました。その矢先に起きた湾岸戦争が、この大きな可能性をハイジヤックする形で、方向性が間違つたのではないかと今に思っています。その湾岸戦争の中、バグダッドに私はとどまつて、湾岸戦争が軍事力行使ではない形で、このイラクのクエート侵攻を解決していく手段を模索しようとしていました。

そのイラクの活動の帰路、モスクワにたまたま入つた八月のことです。ゴルバチョフ大統領がクリミアで幽閉されてクーデターが勃発します。その中で私はモスクワで市民とともに、モスクワの街全体が軍と戦車によって包囲されている中、ロシア国会議事堂、通称ホワイトハウスに一般市民が籠城してバリケードが築かれていました。そこにた

くさんの戦車が一触即発でそのバリケードを撤去しようとしていました。その渦中に私もバリケードに行つて、モスクワの人たちと一緒に、私の平和のお祈りを続けておりました。ついに三日目にして、ソ連の軍がモスクワの市民の方につきました。そして武力行使なく、そのクーデターは失敗に終わったのです。この時、ソ連のモスクワで一九九一年八月、一般市民の非暴力・不服従・市民抵抗の力によつてクーデターが失敗に終わったわけです。その年の十二月、ゴルバチョフ大統領はソビエト連邦の消滅を宣言しました。その大激動の渦中の中を、私みずからその場に居合わせて祈りを捧げていました。大きな激動のその現場の中で私はヨーロッパに、バグダッドに、ベルリンに、モスクワにおいて、祈りを続けてきました。

今現在三〇年を過ぎた今日、世界は冷戦後、ソ連崩壊後の新しい国づくり・社会づくりを失敗した現実のなから、今ウクライナの戦争の渦中にあります。世界はかつてない形での最も大いなる危機と言つてもいいでしょう。三〇年

間ソ連崩壊後、私は旧ソ連圏を今日まで歩んでいます。チエチエン戦争も体験しました。コーカサス、中央アジアの国々も巡ってまいりました。その中で言えることは、プーチン大統領が今日まで進めてきた、ウクライナに軍事侵攻していくその過程というものは、来るべくして来た世界的な危機を今日もたらしたと見ています。真実というものを否定していく過程、その結果が今日のロシアとロシア社会の国のありようだと見ています。そして、ウクライナの国の独立そのもの、ウクライナの人たちが新しい民主的な国というものを作るために、ウクライナだけではない旧ソ連圏の全ての国々、全ての市民が直面し試行錯誤し、いろんな危機を乗り越えながら今日まで来ました。ウクライナに軍事侵攻したプーチン大統領の歴史観・世界観、それを大きく支援していくソ連崩壊後の今日のロシア社会の共同意識のありようというものが作られていく過程において、最大の悲劇は真実を常に否定し続けてきた、その結果が今日のウクライナに対するロシアの軍事行動だと思います。

そしてその軍事行動は引き続きヨーロッパ社会、それから全人類の存続の願いを人質にして、ウクライナ国そのものを否定する軍事行動、これは絶対に認めてはいけなない線を超えています。極論すれば、サダム・フセインがクウェートに侵攻したときに国際社会が国連決議のもとに軍事行動を起こし、制裁を起しました。私はそれを大きな間違いだと見ていますが、それはそういう形でイラクに対する軍事行動があつたわけです。ロシアが今ウクライナにやっている軍事行動は、ウクライナそのものの民族自決・独立・領土保全、その全てを武力行使によって否定しています。それは国際社会全体の根幹の基本的な国連憲章・国際法の全てを踏みにじって行われたわけです。なぜ国際社会はイラクで軍事行動を起こしたように、このロシアの軍事行動を止めることができないのでしょうか。ウクライナの国は自分たちの国家の生存をかけてやむを得ず戦い続けていますが、ウクライナの国の今のあり様を私はチエチエンでも見ました。どのような形でチエチエンの村々、町々

が一つ一つ殲滅され、一般人が虐殺され、しらみつぶしに焼け野原になっていったわけです。その時に国際社会はそれを許容して受け入れてしまったわけです。その方法をプーチンはどこの国でもやっております。そしてウクライナの国そのものの存在を破壊させようとしております。

かつて第二次世界大戦を引き起こしたヒットラーの進軍を、どの一国が止めることができたでしょうか。オーストリア、ハンガリー、チヨコスロバキア、オランダ、フランス、どの国も一國でヒットラーのファシズムの思想・軍事情動を止めることはできませんでした。それを止めることができたのは世界的団結によってヒットラーを止めることができました。もしそういうやり方でいけば、ウクライナに侵攻したプーチンのロシアをどうしてウクライナ一國で止めることができるでしょうか。もしウクライナが止めることができない時には、ウクライナの全滅を世界は受け入れるのでしょうか。核戦争という最後の手段というものによって全人類が人質にされた時には、あらゆる国際犯罪・

戦争犯罪はやむなく認められていくのでしょうか。今、本質的に我々に問われているのはこの問題だと思います。ここで非武装は有効なのでしょうか。ここで非暴力は有効なのでしょうか。これからの世界において武力を行使することを否定するという国際秩序の根幹を今、人類は放棄するのでしょうか。日本の第二次大戦後の国是として、不戦・非武装ということが最も大切な国家理念の根幹となっております。それは全人類社会が第二次大戦後、完全軍縮、武力不行使という非戦の理念の下で、全人類の世界平和の根幹を築こうとする最も大切な理念がそこにありました。冷戦終結・ソ連崩壊という激動を、プーチン大統領は二〇世紀最大の地政学的なカタストロフィーだと捉えます。しかしそれを成し遂げたゴルバチョフ氏の時代精神と理念は、武力を行使しないで新しい不戦・非暴力・非核世界を築く、この冷戦終結とソ連消滅の根幹としての時代を作っていく理念であり精神でありました。

今多くの人は覚えていないかもしれませんが、ゴルバチ

ヨフ大統領がニューデリーを訪問して、当時のインドの首相であつたラジーヴ・ガンデー首相と共に一つの文書に署名しました。それはニューデリー宣言という文書です。そのニューデリー宣言のタイトルは、「非核・非暴力世界の未来に向けて」です。非核・非暴力世界を実現しようという時代精神と理念のもとで、冷戦終結とソ連の平和裏の消滅があつた。プーチン大統領はそれを全否定した上で、どういふ世界を目指そうとしているのか。今日までのプーチン治世の全ては、武力行使の肯定のもとで、ソ連崩壊後今日までのロシアのあり様は真実を否定していった。その嘘の虚構のもとで、武力行使をことごとく肯定していった。総決算が今日のロシアの現実に他なりません。今宗教者はこの危機に対してどのように対応すべきでしょうか。今宗教者があらゆるイデオロギーを、宗教の教義、ドグマを超えて、全人類万人が生き延びていくための根拠として武力行使を否定して不戦・非戦・非暴力を貫く。その上で人類を全滅していく国家権力が持っている核の武力というもの

をどう否定し削減して、非核世界を実現していくのか、もう一度、ゴルバチョフ大統領とインドのラジーヴ首相が宣言した「非核・非暴力世界」という理念を取り戻すことが、ウクライナの危機から全人類を救っていく第一歩だと思ひます。それを先ず世界の宗教者が一致して、その理念のもとで一つになっていく。

私どもの法華経の修行において、それを「実乗の一善」と言ひます。あらゆる人たちが一つの乗り物に乗る。その一つの乗り物は、世界を破壊していく三界火宅の炎の中から、あらゆる生きとし生けるものを一つとして、その渦中から救ひ上げるといふ、今まさにその時期に来ているのだと思ひます。世界の宗教者、まさに今こそ、その一つの真実の道に向けて目覚めて、全人類を導いていく時が、今日このウクライナ危機の渦中において問われていることだと思ひます。ありがとうございます。

てらさわ・じゅんせい
日本山妙法寺

戦争と平和の基盤としての個人

峯岸 正典

はじめに

この度は私に発表の機会を与えていただき、誠にありがとうございました。本来なら、最初から参加するべきでありましたが、私は現在、パリにおりまして日本と七時間の時差があるため、また、自分自身の発表準備が整わないため、遅れての参加となりましたことを、はじめにお詫び申し上げます。

今回、私は大きく分けて三つの事柄について、お話をさせていただきます。

一つは、島秋人という歌人の短歌から、私が学びえたことについてのお話です。

二つ目は、ポーランドに避難してきたウクライナの人たちへの支援活動から考えさせられたことについてです。三番目は、不断の、つまり継続的な対話の必要性ということについてです。

多面的な武器としての人間

ローマで島秋人の歌を紹介することになった前提は、聖エジディオ共同体主催の集いの中で、核兵器廃絶について話をしてほしいという依頼から始まりました。私は自分の言葉で核兵器廃絶について語ることはできないと感じました。理由は、核の抑止力をどう考えるかというところにあります。たとえば、現在、NATOとロシアが直接的な戦

争にならないように、双方が最大限の注意を払っているという報道がありますが、それは、核を使用する可能性があるというプーチンの脅しが功を奏しているという側面もあるかと存じます。つまり核が戦争拡大の抑止力となつていくということですが。言葉だけの核兵器廃絶を述べるよりは、私にとっては、私たち自身が一つの武器にもなりうるということに焦点を合わせることが、戦争を考えるうえでより本質的だと思つたからであります。

まず、人間の理と情の両方の観点から島秋人の短歌をより深く理解するために、彼の来歴を少し丁寧に説明させていただきます。島秋人というのはいわゆるペンネームです。

彼は「一九三四年（昭和九年）、現在の北朝鮮で生まれました。「父親は旧満州や朝鮮で警察官をして」いました。署長だったようです。戦後は公職追放であったようですが、不遇で、「母親も結核に罹患したうえに栄養失調で死亡」

するという、日本に帰つてからは大変貧しい生活でした。

自身も脳膜炎や蓄膿症、中耳炎など複数の病気に罹患し、それゆえ学業成績も不良であったようです。「中学校卒業後、職業を転々とし強盗殺人未遂事件」を重ね、「特別少年院送致となり二〇歳まで収容されて」いました。

「少年院退院後、頭痛が続くことから労働意欲がなくなり刑務所に入る」ために「雨宿りした空き家を放火し懲役四年の判決を受けて服役」しました。「しかし刑務所で『ヒステリー性性格異常』と診断され医療刑務所から出所したのは一九五八年（昭和三三年）十月」でしたが、「そのまます翌年二月まで精神病院に入院」しました。

「一九五九年（昭和三四年）二月に退院後、家族のもとで生活を始めたが、三月下旬に東京に行きたいと家出して、放浪生活に」入りました。「四月五日、餓えに耐えかねて新潟県の農家に押し入り、農家の主人（当時五一歳）に重傷を負わせ、妻（当時四三歳）を殺害する強盗殺人事件を引き起こ」したのです。「この事件では、窃盗に入った家

で妻に見つかり居直り強盗になったもの」です。「夫婦と
同家の十代の子供二人の四人を縛り上げたうえ、現金二千
円と背広やスーツケースなどの物品を奪い」ました。「逃
走する際、事件の発覚を恐れ凶行に」及びました。「夫は
殴打され重傷を負い失神したのを殺害したと思った」よう
です。妻は絞殺されました。

一九六〇年（昭和三五年）、三月に地裁は「数多くの凶
悪事件の前科と長期の服役という前歴があるうえ、さらに
本件を起こし、情状酌量すべき点はない^①」として死刑を判
決、一九六二年（昭和三七年）に最高裁判所で判決が確定
しています。

一九六七年（昭和四二年）十一月二日、小菅刑務所で
処刑されました。享年三三歳です。

私（発表者）は島が犯罪者だからといって、その残さ
れた短歌を低く評価することはできない。と思うと同時に、
残された短歌が素晴らしいからといって、島が犯した犯罪

を肯定することもできない。という立場に立っています。

では、凶悪犯であった彼がどうして短歌を作るように
なったか。彼自身の言葉を紹介させていただきます。

私が短歌を始めた事のなりゆきは、昭和三五年の秋
に拘留所の図書を一冊読んでであった。それは、開高
健著の「裸の王様」を読んだことであった。その
中に、絵を描くことによって暗い孤独感の強い少年
の心が少しずつひらかれてゆくと云うすじであって、
当時の私の心をうった読後感とともに、私は絵を描
きたい、そして童心を覚ましたい、昔に帰りたい思
いを強くさせられた。しかし、当時は絵を描くこと
を許されていなかった身には、描きたい思いがふき
あがって来るだけで絵は描けなかった。せめて、児
童図画を見ることによってと思い、図画の先生でも
あった、又、ほめられた事の極めて少ない私が図画
の時間に絵はへたくそだけど構図がよいと云ってほ
められた事のある先生であり、中学一年の時担任の

先生でもあった、吉田好道先生に当時の身分と理由

とを書き、子供の描いた図画が欲しいとお願ひした。

その返書は、親身なもので、自分に対するおどろきと反省をよびおこす優しさで満ちていた。同封されて奥様の手紙があり、その中に少年期を過ぎた家の前の香積寺とそのお住職様を詠んだ短歌が三首添えてあった。これが私の短歌に接した初めであつて、過ぎし日のなつかしさもあり歌は何とよいものであろうかと思つた。これがきつかけとなり、又、刺激ともなつて、自身にふさわしいものとし得て、時折りに詠みはじめ詠んで今日に至つてゐる。^②

また、死刑前夜にも、短く、歌を詠むことへのかかわりを書き残しています。^③

鳥秋人の『遺愛集』の数ある短歌の中から「この手もて人を殺めし死囚われ同じ両手に今は花活く」という歌を紹介します。

自ら人の首を絞めて殺害したその同じ両手が、今は花

を活けている、という歌です。

この歌から私は三つのことを感じとることができると思ひます。

① 同じ一人の人間が善にも悪にもなれる、
② 人は誰でも、自らの身体でさえ、武器にすることができる。

③ 武器にするかどうかは本人の状況次第、心次第ということです。

たとえば、私たちの口から出る言葉でも、人は傷つきます。まなざしでさえ、人はたじろぎ、自分が大切にされないことにおののきます。

私たち一人一人の心の中にある、人を区別し、さげすむ気持ち、相手を打ち負かそうとする思いなどは、私たち自身を、多面的に展開可能な一つの武器にしてしまいます。

そしてその武器をどう使うかは、私たち自身の心にゆだねられている、と私は感じています。

(一) この歌から導き出される、私の一つの学び

一人の人間が「花を生けるといふ」善い状態にあることも、「人の首を絞める」悪い状態にあることもできるわけですから、善い状態を保てるように個人としても社会としても機能していかなければならない、ということであり
ます。

次に、もう一つの短歌を紹介します。

「愛に飢えし死刑囚 われの賜りし菓子 地におきて 蟻を待ちたり」という歌です。

愛に飢えた死刑囚の自分が、頂いたお菓子を地面において、蟻が食べに来てくれるのを待っている、という歌です。

この歌の中に、他者と深い関わり合いを持ちたいという人間の根源的な志向性を私は感じています。誰かの役に立ちたい、喜んでもらいたいという他者への気持ちは独房の死刑囚では実現しにくい。だから、せめて蟻に喜んでもらえればという思いでお菓子を地面に置く。ここから、人間にとっての孤独、そして、幸せとは何かということが問

いかけられてきます。私たちは他者との関わり合いがない限り、本当の意味で自己として安心（あんじん）できない、幸せになれないと訴えかけてくる、と私は感じています。

島秋人の短歌から、私たちは、（人が救われるためにはどうしても他者を必要とする）という事実に向き合わされます。鳥の場合、支援者との面会や文通を通じて、生きることの大切さを実感していきます。同時に、被害者の命を奪ってしまった自分に対して、「償いのできないことが怖い」と言い残して逝きます。彼は獄中で受洗していました。

(二) 島秋人の短歌から導き出される二番目の学び

それは「だれも独りでは救われぬ」*Nobody saved alone*ということだと思えます。なぜ「誰も一人では救われぬ」のか。なぜなら、私たちは他者があって、はじめて自分たちも存在するというあり方において生きているからだとは考えます。言い換えれば、みんなが関係性の中に生きているからであります。

つまり個としての人間は仏教の言葉で言えば「縁起」、

もつと分かりやすく言えばあらゆるものとの「関係」、「連帯」において人間たり得るといふことです。必然的に「誰も一人では生きられない」Nobody lived aloneといふところまで話は進みます。

ウクライナ支援から見えてきたこと

次に、ウクライナ支援から見えてきたことについてお話しします。

ウクライナ支援のための御朱印

昨年二月、ロシア軍がウクライナに侵攻してからまもなく、東京から一二〇キロから一五〇キロ北西という群馬のはずれ、ローカルな地域で、私のお寺も含めて十八ヶ寺が共同してウクライナ難民支援のための御朱印を始めました。他の十七ヶ寺も賛同して募金箱を置いてくれました。その三三ヶ寺に集まったお金を私たちは逐次ポーランドに送りました。なぜなら私たちの隣人にポーランドからの人がいたからです。その方を仲立ちに、ポーランドのシエラ

ツ郡を通じて生活必需品をポーランドで購入し、ポーランドに避難しているウクライナの人たちに送り届けることを続けました。

日本の田舎での活動にしては思いのほか浄財が集まりました。そのうち、ポーランドでウクライナ避難民の支援にあたっている人たちから、支援物資の一部をウクライナ軍に届けても良いかという相談がありました。私たちは検討の結果、それはできないという返事をしました。

理由は私たちが集めたお金は宗教活動の一環として集められたものであるということ。もう一つは、ウクライナで戦っている末端のロシア兵も一人の人間としては犠牲者でもあると考えたからであります。彼らは、一部の人を除いて、国家の命令に従って戦争に従事しているのに過ぎないというのが私たちの判断でした。私たちの心はウクライナに傾いていましたが、片一方の兵隊だけを支援するということは、宗教の理念に反しているとも考えました。

「日月に私心なし」という言葉があります。太陽も月も

分け隔てなく一様にどこの地域も照らしている、ということとです。したがって、仏教の中道という立場を申し上げるまでもなく、どちらかに片寄るということも避けたかったのです。

仏教の根源的な世界観——縁起、そして

実態としての平和

先ほど来「誰も一人では生きられない」と申し上げて来ましたが、見方を変えると、私たちは敵も味方もお互いにつながり合っていないければ、生きていくことができない存在に過ぎない、ともいえます。このつながり合いが乱れるとき、誰もが不利益を被ることになります。

一例を挙げれば、現在、ウクライナ戦争の影響により、これまでお互いを支えていた、エネルギー源の需要と供給に齟齬が生じ、多くの人が、特にヨーロッパで困難にあえています。

「平和は観念ではなく実態である」と、アフガニスタンで医療と国民生活の改善に生涯を捧げた、故中村哲（てつ）

医師は述べていました。

この《実態としての平和》は正しい連帯によってのみ支えられるということです。

私はロシアのウクライナへの侵攻がなければどんなに良かったろうと考える人間の一人ですが、どちらかが勝ち、どちらかが負ければ良いといったレベルでは永遠に正しい連帯というのは生じ得ない、平和はやってこない、少なくとも宗教の立場からはそういうことが言える、と思います。

近代国家と個人

そして、ウクライナ軍への支援を依頼される中で、次のようなことが浮かび上がりました。それは、個人としての人間を戦いに追いつ込む《近代国家とは何か》という問題です。法治国家として存立する国の命令に従うのは国民の義務であります。しかし、法治国家であったにしても、国が判断を誤るといふ可能性もあるわけで、そのとき国民としての個人はどうしたらよいのかという問題です。国家の命令に従うという道もあれば、自分の良心、もしくは宗教的

信念に基づいて選択するという道もあるでしょう。「良心的兵役拒否」という言葉もありました。しかし、総力戦となった場合、歴史を振り返っても「良心的兵役拒否」ということを貫くことは極端に難しくなると推察されます。自分の妹や弟が殺されそうになっても自分の信念を貫くことができるのか、誰にもわかりません。一言で言うと、一人一人の国民を守る義務を持つ国家と、国家を支える一人一人の国民との間にはある種の緊張関係があるということです。

相互扶助

理想から言えば、国家が国民を正しく導くことができるように。また国民が国家を正しく主導できるようにということが大切になります。しかし、その前に私たちの目の前に横たわる「課題」について触れてみたいと思います。それは人間と切り離された宗教は存在しないし、人間が宗教に関わる限り、間違いが起きやすいということにあります。

宗教学者の島蘭進先生は

「正法」を具現化するサンガを王法が支援することにおいて王法の正当性が保証される、と述べておられますが、このことに関連して次の問題を考えてみたいと思います。

ヒューマンエラーの問題——プーチンとロシア正教

ロシア正教のモスクワ総主教キリル一世が、プーチン大統領の軍事侵攻について「対立の起源は西側諸国とロシアの関係にある。NATOが約束を守らず、ロシアとの国境に近づき、軍備を増強してきた。さらに、西側はウクライナの人たちを再教育してロシアの敵に作り変えようとした」という軍事侵攻に理解を示す声明を発表し、各国のキリスト教関係者からも批判の声が上がっているという事実です。⁵⁾

キリル一世は、もつと直接的にウクライナと戦うことを宗教的に正当化したと言われていますが、これに対してウクライナ正教会は激怒したとも伝えられています。

つまり、ロシアの進行が始まって早い段階でロシア正教

会が「侵攻支持」したことで、ウクライナの正教会が反発し、ロシアの東方正教会と同じ日（一月七日）にクリスマスを祝いたくないということで、西側と同じ日（十二月二五日）にクリスマスを祝うという事例が生じました。これに対してロシアの下院議員が批判、という避難の応酬が続いています。

戦争と宗教

実態としての平和

さて、ここで先ほど述べた《実態としての平和》を宗教的行為、たとえば祈りでもたらすことができるのか？という問いを考えてみたいと思います。

なぜなら「祈りさえすれば平和が訪れる」とは、一部の人を除いて誰も考えてはいないと思うからであります。だからと言って「行為さえあれば良い」とも言えません。「祈りなき行為」、「宗教なき行為」の怖さ、危険性も感じているからです。そして、「行為なき祈り」、「祈りなき行為」

の双方にあるそれぞれの不十分さを越えた《実態としての平和》をもたらすことのできる「宗教的営為」が可能なのか考えてみたいと思います。

宗教の枠組みの広さ

その前に、「宗教」の枠組みの広さ、ある意味での普遍性について考えてみたいと思います。具体的に言えば、宗教は国家という枠組みを超えて広がる性質を持っています。だから国家よりも枠組みが広い。しかしそのことと同時に、それぞれの宗教はその宗教の持つそれぞれの性格において、あるいは時代において、国家より強制力が強い場合もあるかもしれないし、弱い場合もあるかもしれない。こうしたことに留意しながら、国家を超えて存立する宗教に要請されている平和希求の一端について、考えを進めてみたいと思います。

正義という言葉への不安

ただ、私は宗教でよく使われる「正義」という言葉を

聞くと、心の中で慎重になります。それは、時々、正義という言葉が、目的のために不当な手段を正当化しようとする傾向を助ける言葉になることがあると感じているからです。ロシア側にはロシア系住民の生活の安寧のために進軍するという「正義」があります。他方、ウクライナ側には自分たちの国土と国民を守るという「正義」があると思われまます。この二つの異なった「正義」のために戦いが行われている。

しかし、正義というのは相対的なものなのでしょうか？ 私にはそのようには思えません。その一方で、絶対的な「正義」が請求（しょうらい）されるとも思えません。絶対的な「正義」が請求され得るものであるならば、歴史上の戦争、破壊はもつとずつと少なくなっていたはずだと感じるからであります。

真の正しさとは

では絶対的正義ということを描定しない、和解への道行きは戦争、紛争においてあるのでしょうか？

私は修行道場で「正しい」という字は「一つに止（とどまる）」と書くと教えられました。こっちが正しい、あっちが間違っているというレベルではまだ本当の正しさに到達していない。みんながそれで以て一つにまとまることのできるものが「正しい」ということなのだ、と学びました。

これを理念なき妥協と捉えては間違いになります。これは理念なき妥協ではなく、現実そこに《実態としての平和》をもたらす具体的な手立てなのです。この手立てを失うと私たちは永遠に戦っていかねばなりません。三〇年後に平和が訪れるためにはなく、今ここに平和が訪れるために私たちは何をしたら良いのか？あるいは何ができるのでしょうか？という問題意識に繋がります。

祈り―創唱者の祈りに立ち返る

そこで、もし仮に今の世にモーゼ、あるいはイエス、またはムハンマド、もしくは釈尊がいらつしゃったとしたら、どういってお言葉を発し、どういふ行動を取られたのか？これが私の問いになります。

なぜかと言うと、宗教的行為、たとえば祈りが平和の源泉になるためには、まず、それぞれの宗教の「創始者」の祈りあるいは行に立ち戻って、私たち自身が自らを省み、自己の中にある弱さ、悪いことへの傾きを見つめ直すことが必要となると考えるからであります。その上で、葦よりも弱い人間としての私たちに何ができるのかを自らに問いかける必要があると思うからであります。

霊性——祈りの場としての自己

ここで言う「祈り」を「霊性」という言葉に置き換えることも可能かもしれませんが。「霊性」とは、私たち一人一人の人間の奥深くにありながら、そしてまた一人一人の人間を超えて、私たちに生きる力を与えてくれるものと私は受け止めています。私たちはどういう立場にあっても、宗教的な意味において純化されうる、そういう霊性が自己という場において生まれ得るのかどうか、私たちは不断に自己を顧みなければなりません。

各教団の反省

戦後、日本の多くの宗教教団は、第二次世界大戦において戦争に宗教として加担したことを反省し、文章化しています。たとえば、二〇〇三年（平成十五年）、曹洞宗は「世界平和を願う曹洞宗の祈りと誓い——過ちは繰り返しません——」という文書を発表しています。

ひろさちや氏の批判

こうした各教団の動きに対し、宗教評論家のひろ・さちや氏は戦後、日本仏教は平和活動を熱心に行っているかのように見える。しかし。戦前、日本仏教は戦争遂行への多大なる協力を惜しまなかった。構造的には現在の仏教による平和活動も戦前の戦争協力と変わらないのではないか、という問題提起をしています。

この問題提起は、戦前と戦後における宗教教団の戦争と平和に対する対応は、各宗教教団が、それぞれ、時代の風潮に付度しただけではないのかという問いを含んでいると考えられます。

反省を持続させるために

そこで、各教団の反省をゆるぎないもの、持続させるために必要なことは、各教団が、その宗教的原点（宗祖）に帰る、という志向性を強めるということだと思われま

具体的には、たとえば華嚴経で「信は道の母、功德の元」（華嚴経第六賢首菩薩品）と述べられております。換言すれば、信仰は、自らをして真実に近づけるものですから、自らの信仰の純化、深化がはからなければなりません。

次に、判断を間違えないために、不断の、あるいは継続的な自己無化が必要であると思われま

どうして、そういうことが言われなければならないかというと、私は宗教それ自身に反宗教性が内在していると考えられるからであります。

そもそも宗教教団というのはその教えがもつとも正しいと信じる人たちの集まりであります。だから、どうしても保守的にならざるを得ません。くわえて同じ考えを持つ者同士が集まるという力学の中に、他の考え方を保持する

人たちははじき出す力が働いてくる。つまり宗教には宗教である限り、集団としての排他性が内在すると考えることができます。同時に、物事は簡便な方向に進みやすいので、この教えが一番正しい、あとは間違っている。この教えでなければ救われないという言葉が、語られやすく、かつ説得力を持ちやすくなってしまふ場合も多いと考えられます。

自己を無にする祈り、靈性が支える平和への連帯

そこで強調されなければならないことは、平和をもたらす清らかで正しい連帯は、自己の根源へと向かう、自己のエゴを無にするような清らかな祈り、靈性によって支えられる、ということです。

さらには多元的な世界の中で、宗教、国家の違いを超えて、全人類という視点から、こうした宗教的行為、祈りとか、あるいは靈性とかをみんなで分かち合うことができるのか！という問題提起が必要になると私は考えています。

グローバルな社会に生きる個人の責任としての〈自立した個における連帯〉の必要性。

連帯は人間であることを可能にする、というのが私のよって立つ立場であります。こうした問題意識に関連してもう少し話を進めさせていただければと存じます。

平和の「和」という言葉の成り立ちについて、修行先で教えられていることを少しお話ししてみたいと思います。「和」という字は、のぎへんに口と書きます。のぎへんは稲の束を表しているそうです。その隣に口があいている。つまり、稲の束、手に入れたものを自分が独占しないで他と分かち合うというのが、和の成り立ちだということです。宴席でカツオのたたきが大皿に盛られて回ってきた。おいしそうだと思いき切れ頂こうかと思つて、ふとあたりを見まわしたら大勢いる。三切れ取つたら遠くの人に回らなくなると思つて一切れにする。それを遠くを慮（おもんばか）る、すなわち「遠慮」というと教えられました。

同じく「いたわる」という言葉も自分の心を遠くにいる相手に届けて、いたして、相手の心をくみ取り、その人の願っているようにしてあげることが「いたわる」ということなのだと思われました。そのときの、遠くとはどこでしょうか？ウクライナか？シリアか？あるいは隣のお年寄りか？

思うに、遠くというのは距離の問題ではなく、困っている人のそばを指しているとは私は受け止めています。つまり宗教というのは困っている人のそばに立たなくてはいけない、ということだと思います。

そのうえで、グローバルな社会に生きる個人の責任として、求められていることは、信仰を含め、ありとあらゆる違いを超えた共存への志向性だと考えています。

そのためには

- 一、まず百パーセント相手を認める。
- 二、そのうえで相手の理解をはかる。
- 三、そのためには不断の行為としての対話が必要となる、

というのが私の考えです。

但し、その対話にはマナーが要請されると考えます。

対話、お互いが真に出会うための方法、態度について、日本的に言うならば心を開いて相手に一步近づくといい「挨拶」の精神が必要になると考えます。

① 真に聞こうとするとき、つまり対話の相手に本心を語ってもらおうと思うなら、相手の言うことが本当に正しいと思ったら、自分はその相手にしたがって変わろうという「開かれた覚悟」が必要となる。こちら側にそうした態度がない限り、相手は本当に心を開いて語ってはくれない。

② もし誰かを本当に好きになったら、その人のことを正しく知りたと思うし、自分のことも正しく理解してほしいと願う。そこまで行かないと本当の対話にはならない。

③ 対話の根底には、キリスト教の言葉で言えば「愛」、大乘仏教の言葉で言えば慈悲、「菩薩の願い」がなく

てはならないし、共感のない対話というものは反感を生むだけのものとなる、と思われまます。

これまで（自律した個の自覚から連帯へ）という方向で話を進めてきましたが、意味するところははっきりとした自己がないと真の対話が始まらない、ということでありまます。しかしながら同時に（連帯から個への自覚）という道筋もあるということも補足しておきたいと思えます。いずれにいたしましても、戦争に傾くか、平和に傾くかは一人一人の個人の在り方によって左右されると考えられます。

そこで結語として、私には希望があります。それは、すべてのものが繋がっているという縁起の世界観からすれば、日常生活の中で私たち一人一人が具体的な取り組みを達成できれば、世界は変わる、ということですし、そうでなければ、変わらないということでもあります。

最後に、行き届かない話をここまでお聞きいただき誠にありがとうございます。忌憚のないご叱正を頂ければあ

りがたく存じます。それを今後の精進の糧にできればと願っております。至らない話ですが、ご清聴、本当に、ありがとうございました。

みねぎし・しょうてん

曹洞宗ヨーロッパ国際布教総監

註

① https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B3%B6%E7%A7%8B%E4%BA%BA_%E7%BE%9Cの「」内の文章は当サイトからの引用。

② 『遺愛集』あとがき、一九六五年（昭和四〇年）三月。

③ 「知恵のおくれた、病弱の少年が、凶悪犯罪を理性のない心のまま犯し、その報いとしての処刑が決まり、寂しい日日に児童図画を見ることよって心を童心に還らせたい、もう一度幼児の心に還りたいと願い、旧師の吉田好道先生に図画を送って下さる様にお願いました。その返書と一緒に^{あやこ}絢子夫人の短歌三首が同封されており私の作歌の道しるべとなつてくれました。」（『遺愛集』あとがきに添えて、一九六七年、昭和四二年十一月一日夜）。

④ 島蘭進『日本仏教の社会倫理——「正法」理念から考える』岩波現代全書、二〇一三年。

⑤ NHK news web 二〇二二年三月二九日十五時二〇分 https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220329/amp_k10013557301000.html。

教皇フランシスコ『ラウダート・シ』 におけるインテグラル・エコロジーと戦争

角田 佑一

はじめに

本稿の主題は、教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジーと戦争との関係について説明することである。本稿の構成は以下のとおりである。

まず、「一、インテグラル・エコロジーとは何か」においては、インテグラル・エコロジーがいかなる要素によって構成されているのかを明らかにしている。「二、『ラウダート・シ』における戦争に関する言明」の中では、『ラウダート・シ』において語られるインテグラル・エコロジーと戦争との関係について説明している。「三、エコロジカルな教育とエコロジカルな霊性」では、インテグラル・エ

コロジーを実現するために、私たちがどのような生き方を
して、いかなる世界観を持つべきなのかを明らかにしてい
る。「結語」では、本論で述べた内容をまとめ、『ラウダ
ート・シ』におけるインテグラル・エコロジーと戦争との
関係を説明している。

インテグラル・エコロジーとは何か

環境的、経済的、社会的なエコロジー

教皇フランシスコは回勅『ラウダート・シ』の中で、現
代世界においてインテグラル・エコロジーを推進すべきで
あると述べる。インテグラル・エコロジーとは、「環境的、

経済的、社会的なエコロジー」、「文化的なエコロジー」、「日常生活のエコロジー」という要素によって構成される総合的なエコロジーである。本章では、『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジーとは一体何なのかを明らかにする。そして、本節ではインテグラル・エコロジーの中の「環境的、経済的、社会的なエコロジー」について説明する。

教皇フランシスコによれば、エコロジーとは「生命体とその生育環境とのかかわりの研究」である。この研究は「社会の存在と存続に必要な諸条件に関する考察と討議」、「開発と生産と消費の特定のモデル」を問い直すために必要な正直さを伴っている。地球における物理的、化学的、生物学的な多くの側面が互いに関係しあっていると、生物種も「探り尽くされたり知り尽くされたりすることは決してないネットワークの一部」である（『ラウダート・シ』¹ 138）。人間の遺伝情報の多くは、多くの生物と共有されているように、「知識の断片化や情報の細分化」が、「現実に

対するより広範な展望」に向って統合されないなら、現実には「一種の無知」に陥る（同上 138）。²

教皇フランシスコによれば、「環境」について考える際に私たちが言おうとしていることは、自然と自然の中で営まれている社会との関係である（同上 139）。³ 私たち人間は自然を自分たちとは一切関係のないもの、人間の生活の「単なる背景」とみなすことはできない（同上 139）。⁴ それゆえ、エコロジーの問題を考えるためには、「さまざまな自然システム間の相互作用および社会の諸システムとの相互作用を考慮した、包括的解決の探求」が必要である。私たち人間は「環境危機と社会危機という別個の二つの危機」に直面しているのではなく、「社会的でも環境的でもある一つの複雑な危機」に直面している。それゆえ、この危機を解決するためには、「貧困との闘いと排除されている人々の尊厳の回復」と「自然保護」とを統合したアプローチが必要である、と教皇フランシスコは述べる（同上 139）。⁵

教皇フランシスコによれば、具体的な事業を始める際

の環境影響を調べる研究をすると、異なった被造物が互いにどのように関係しあつて、「生態系」(エコシステム)を形成しているのか、よりよく理解することが可能になる(同上110)⁶。「生態系」(エコシステム)について考慮するのは、生態系に属する被造物をいかに人間が利用するのかを知るためではなく、それらの被造物が人間にとつての有用性とは別の「内在価値」を持つているためである。「一つ一つの有機体」、「一定の空間に存在し一つのシステムとして機能している調和の取れた有機体の集合」は、神の被造物として「それ自体で善なるもの、感嘆すべきもの」であると教皇フランシスコは述べる(同上110)⁷。実際に「二酸化炭素の吸収、水の浄化、疾病や流行性感染症の制御、土壌の形成、廃棄物の分解」において、さまざまな生態系が互いに作用しあつている。そして、私たち人間はそのような生態系の相互作用のシステムに支えられて生きている。それゆえ、私たちが「持続可能な利用」について語るとき、「各生態系の再生能力」を考慮しなければならない(同上

110)と教皇フランシスコは考へる。⁸
文化的なエコロジー

本節では、インテグラル・エコロジーの中の「文化的なエコロジー」について説明する。教皇フランシスコによれば、現代社会においては「自然という遺産」だけではなく、「歴史的、芸術的、文化的な遺産」も脅威にさらされている。このような遺産はそれぞれの場所で共有されているアイデンティティの一部分である(同上113)⁹。環境に優しい都市を造るとき、「それぞれの場所の歴史、文化、建造物」を取り入れて、「その場所固有のアイデンティティ」を維持する必要がある。それゆえ、エコロジーは「人類の文化財の保護」に積極的に関与すると教皇フランシスコは言明している(同上113)¹⁰。エコロジーは、環境問題の研究において、「専門的な科学言語と民衆の言語との対話」を大切にし、地域文化により大きな配慮を示すように求める。人間の文化とは「過去からの継承以上のもの」であり、人間と環境との関わりを再考するためには外すことのできな

いものであると教皇フランシスコは述べる（同上 143）。¹¹⁾

教皇フランシスコによれば、「人間がもつ消費主義的な考え方」は、現代の「地球規模化した経済機構」によって助長され、「諸文化の均一化」を促進し、結果として「全人類の相続財産であるはかりしれない多様性」を損ねてしまふ（同上 144）。¹²⁾そして、地域共同体のあらゆる問題を外部から「画一的な規制や技術的介入」によって解決しようとする試みは、その共同体の人々の積極的な参加を必要とする「地域の問題の複雑さ」を看過させてしまふ（同上 144）。¹³⁾地域共同体が自らの抱える問題を解決して、自身自身で発展していくためには、その地域の文化を基礎としなければならず、「民族や文化の諸権利を尊重し、歴史的過程なくして社会集団の発展はありえない」ことを理解しなければならぬ。この歴史的過程は、文化的文脈の中で進行し、「地域住民に固有な文化の内部からの継続的で積極的な参加」を求める。それぞれの地域の人々の「生活の質」も、「人間集団それぞれに固有の象徴と習俗の世界の内部」

から理解されなければならないと教皇フランシスコは述べる（同上 144）。¹⁴⁾自然破壊によって環境を酷使し、悪化させることは、地域共同体の生活を支える資源を枯渇させるだけではなく、長い間、文化的アイデンティティを養い、生きることに共に暮らすことの意味へのセンスを育てて来た社会構造を破壊してしまふ。一つの文化の消失は、植物や動物の一生物種の消失と同じように深刻であると教皇フランシスコは考える（同上 145）。¹⁵⁾

日常生活のエコロジー

本節では、インテグラル・エコロジーの中の「日常生活のエコロジー」について説明する。教皇フランシスコによれば、人間社会の真の発展は、「生活の質の全人的改善をもたらす取り組み」を含んでおり、「人々の生活条件」を考慮しなければ実現しえないものである。そのような生活条件は私たちの思考、感情、行動のあり方に影響を与える。もし、その環境が乱雑で無秩序なものであり、騒音と醜悪さに満ちたものであるならば、私たちは充足感や幸福

感を見出すことができなくなる(同上147)¹⁶⁾。しかし、環境上の制約や困難があっても、貧しい人々が実践するヒューマン・エコロジーがある。共同体の中で人々が親しく交わり、「連帯と帰属のネットワーク」に支えられていると一人ひとりが感じ、環境上の制約が埋め合わせられるならば、どのような場所も、「地上の地獄」から「尊厳ある生の舞台」に転換しうると教皇フランシスコは述べる(同上148)¹⁷⁾。

教皇フランシスコによれば、ヒューマン・エコロジーの本質として、私たち人間は自分たちの身体によって、自然環境との関わり、他の生き物たちとの関わりに置かれている。私たちが自分たちの身体を神からの贈り物として受け入れることは、「全世界を、御父からの贈り物として、また、わたしたち皆がともに暮らす家として、迎え入れられた受け取るためにきわめて重要なこと」である。私たちが「自分の身体に対して絶対権力を有していると思いなすこと」は、「被造界に対して絶対権力を有していると思いなすこと」

につながると教皇フランシスコは述べる(同上150)¹⁸⁾。以上のように、教皇フランシスコはインテグラル・エコロジーを構成する「環境的、経済的、社会的なエコロジー」、「文化的なエコロジー」、「日常生活のエコロジー」の内容を説明している。

共通善の原理

教皇フランシスコによれば、インテグラル・エコロジーは、共通善と不可分である。共通善とは「集団と個々の成員とが、より豊かに、より容易に自己完成を達成できるような社会生活の諸条件の総体」を意味する(同上156)¹⁹⁾。共通善を考える場合、全人的発展に向けて基本的諸権利を賦与された人格として、一人ひとりの人間を尊重することが共通善の原理の前提となる(同上155)²⁰⁾。共通善を実現するためには、補完性の原理を適用して、さまざまな「中間集団」の発展が重要である。この「中間集団」の代表が「社会の基本細胞」としての「家族」である(同上157)²¹⁾。教皇フランシスコによれば、「共通善の要求」は社会的平

和や「何らかの秩序がもたらす安定や安心」である。これらを実現するためには、配分的正義への配慮が重要である。もしも、配分的正義が損なわれるならば、その後にはいつも暴力がやって来る。そのため、「一つの全体としての社会」、とりわけ国家は「共通善を保護し促進する義務」を負っている。と教皇フランシスコは述べる（同上157）。

さらに教皇フランシスコによれば、共通善は世代間正義をも含んでいる。環境はあらゆる世代に貸し付けられているものであり、いずれは次の世代に手渡さなければならぬ（同上159）。²³ 私たちが次の世代の人々に、どのような世界を残そうとするのかを考えると、私たちがこの世界で何のために生きるのか、なぜここにいるのか、私たちの活動とあらゆる取り組みの目標が何なのか、私たちが地球から何を望まれているのかを問わなければならない（同上160）と、教皇フランシスコは述べる。²⁴ そして、たんに将来の世代の人々のことを考慮すべきであると言うだけではなく、現代に生きる私たちの尊厳が危機にさらされている

と理解すべきであり、「生息可能な惑星」を将来の世代に残すことは、現代の私たちに掛かっているものであり、現代の私たちの「地上での滞在の究極的意味」と関係していると教皇フランシスコは考える（同上160）。²⁵

以上のように教皇フランシスコは『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジーの内容を明らかにしている。さらに教皇はアシジの聖フランシスコが、インテグラル・エコロジーの最高の模範であったと述べる。アシジの聖フランシスコは、「被造物と、貧しい人や見捨てられた人」への愛に生き、すべてのものに開かれた心を持ち、「神と、他者と、自然と、自分自身との見事な調和のうちに生きた神秘家であり巡礼者」であった。そして、彼は「自然への思いやり」、「貧しい人々のための正義」、「社会への積極的関与」、「内的平和」の結びつきが分かちがたいものであることを示した（同上160）。²⁶ このようなアシジの聖フランシスコの生き方へと教皇は私たちを招いている。

『ラウダート・シ』における戦争に関する言明

調和の破壊としての戦争

教皇フランシスコは、『ラウダート・シ』の中で戦争について以下のように述べている。創世記における創造物語を見ると、神との関わり、隣人との関わり、大地との関わりによって、人間の生命が成り立っていることが分かる。しかし、人間の生命にかかわるこの三つの関わりは、外面的にも、内的にも引き裂かれてしまった。この断裂が罪であり、人間が神に取って代わり、被造物としての限界を認めるのを拒んで、「創造主と人類と全被造界の間の調和」が壊されてしまった(同上90)²⁷。アシジの聖フランシスコが神とすべての被造物との関係の中で経験した調和は、そのような「断裂のいやし」として受け止められた。教皇フランシスコによれば、アシジの聖フランシスコが「あらゆる被造物との普遍的な和解」を成し遂げたとき、「原初の無垢な状態」に戻ったとフランシスコ会の神学者ボナヴェントウラは理解した。そして、「戦争、種々の暴力や虐待、

もつとも脆弱な者の放置、自然への攻撃」など、「罪の破壊力のすべてが露わになっている」現代の状況は、神と全被造物との調和に反するものである(同上90)²⁸。このように教皇フランシスコは、戦争が三つの次元の調和、すなわち神と人間との関係における調和、人間同士の関係における調和、人間と他の被造物との関係における調和を破壊するものであると考えている。

さらに教皇フランシスコは『ラウダート・シ』において、もしも、私たち人間の心が「天地万物との交わり」に開かれていなければ、このような「友愛の感覚」はどのような被造物をも排除しない。地上の被造物に対する無関心や残虐行為は、他の人間への接し方にも影響を及ぼすものである(同上92)²⁹。教皇フランシスコによれば、「いかなる被造物に対するいかなる残虐行為」も「人間の品位に反する」ものであり、「平和、正義、被造界の保全」は相互に関係しあった三つのテーマである。私たち人間は、「被造物一つひとつに向けられる神の愛」によって結び合わされ、「驚

きに満ちた巡礼をとにもする、兄弟姉妹」として呼び集められている。この愛は「兄弟なる太陽、姉妹なる月、兄弟なる川、母なる大地への柔和な情愛」によって、私たちを一つにするという（同上92）。ここで教皇フランシスコは人間が人間以外の他の被造物（動物・植物など）に対して残虐な行為を行うならば、それはおのずと他の人間との関わり方へと影響を及ぼすと述べる。そして、そのような行為は、最終的に人間に対する残虐な破壊行為につながることをも暗示している。

教皇フランシスコは『ラウダート・シ』の中で、テクノロジーの発展に伴う現代の戦争について、自らの見解を以下のように述べる。私たち人間は「核エネルギー、バイオテクノロジー、インフォメーションテクノロジー、人間のDNAに関する知識、また、獲得してきた他の多くの能力」によって、「絶大な権力」を手に入れた。そして、そのような技術や能力についての知識、それらを用いる経済力のある人々に、「人類全体と全世界に及ぶ強大な支配権」

を与えてきた（同上104）。³¹ このような絶大な権力が賢明に行使される保証はどこにもなく、二十世紀において「核爆弾、ナチズムや共産主義やその他の全体主義体制による何百万人もの殺戮」に数多くのテクノロジーが用いられたことを思い起こすと、現代の戦争では「これまで以上に破壊的な兵器」が用いられる可能性がある（同上104）。³² 教皇フランシスコによれば、自然資源が枯渇してしまうと、新たな戦争を引き起こす動きが出てくる（同上5）。³³ 戦争はつねに「環境と諸民族の文化的な富」に「深刻な損害」を与えるものである。そして、核兵器や生物兵器を想定すると、その危険はさらに甚大なものになる。それゆえ、「新たな紛争を生じさせかねない原因の発生予防や解決」を目標として、「政治の立場から大いに目を光らせておくこと」が求められると教皇フランシスコは述べる（同上5）。³⁴ 教皇によれば、インテグラル・エコロジーは「暴力や搾取や利己主義の論理」と決別する日常の言動によっても作られている。そして、「消費が肥大する世界」は「あらゆる形

態のいのちを虐待する世界」でもある（同上 230）⁸⁵。

『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジー

と戦争との関係

ここで、『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジーと戦争との関係について、筆者の解釈を述べてみたい。まず戦争はインテグラル・エコロジーが実現されていない事態で発生する。すでに述べたとおり、インテグラル・エコロジーは「環境的、経済的、社会的なエコロジー」、「文化的なエコロジー」、「日常生活のエコロジー」から構成されているが、経済発展に伴って消費社会が著しく発達して天然資源が枯渇すると、他の国々に天然資源を求めて戦争が引き起こされることがある。そして、人間社会の中で配分的正義が実現されずに貧富の差が広がると、さまざまな暴力が社会の中で起こるようになる。その中で、国家間で、あるいは一国家内の諸勢力の間で戦争が起こると、その戦争はインテグラル・エコロジーを構成する「環境的、経済的、社会的なエコロジー」、「文化的なエコロジー」、「日

常生活のエコロジー」をより深いレベルで破壊する。すなわち、戦争は自然環境を破壊し、人間の生命や社会生活を破壊し、人間以外の生命体（動物など）の命を奪い、人間の文化的遺産を破壊し、人々の生活の質を著しく損なう事態をもたらす。そのような破壊行為は、「集団と個々の成員とが、より豊かに、より容易に自己完成を達成できるような社会生活の諸条件の総体」としての共通善をも否定する行為である。人間の創世記を見ても分かるように、人間存在は神との関係、人間同士の関係、他の被造物との関係の中で成立している。そして、これら三つの関係に深い断絶をもたらすのが罪である。このような深い断絶を最高度にもたらすのが戦争なのである。

エコロジカルな教育とエコロジカルな靈性

愛の実践

インテグラル・エコロジーを理解し、実践するために、私たちはどのように生きればよいのか、教皇フランシスコ

は『ラウダート・シ』の中でさまざまな指針を示す。教皇

フランシスコによれば、私たち人間は「自分自身から出て他者へと向かうことができる存在」である。自分自身から出て他者へ向かうことができなければ、「それぞれの価値をもつ他の被造物」を認めることができず、他者への配慮もできなくなってしまう(同上 208)³⁵。私たちが「自己を超えて出るという基本的姿勢」を持ち、閉塞性と自己中心性を超えていくことが、他者と環境への配慮を基本的に可能にする土台である。これからのエコロジカルな教育の中では、「わたしたち自身の中での調和」、「他者との調和」、「自然やいのちある他の被造物たちとの調和」、「神との調和」という種々のレベルでエコロジカルな調和を回復することを目指すべきである(同上 210)³⁶。さらに教皇フランシスコはリジューの聖テレジアによる「愛の小さき道」の実践を例に挙げ、インテグラル・エコロジーが「暴力や搾取や利己主義の論理と決別する、日常の飾らない言動」によって支えられていると述べる(同上 230)³⁸。

被造物における神の現存——受肉・秘跡・休息

教皇フランシスコは『ラウダート・シ』において、「天地方物は、遍在する神において、真の姿を開示します。それゆえ、ひとひらの葉に、一本の野道に、一滴の露に、貧しいだれかの顔に、神秘的な意味が見いだされるのです」と述べる(同上 233)³⁹。私たちは心の中に神のはたらきをより深く感じるとき、他の被造物において神をより深く認識することができるようになるという(同上 233)⁴⁰。被造物における神の現存について考察する場合、神のロゴスの受肉について考えることが重要である。教皇フランシスコは「キリスト者にとって、物質世界のすべての被造物が自らの本当の意味を見いだすのは、受肉したみことばにおいてです」と述べている。それは神の独り子が人間となつて物質界と結ばれて、物質界に「決定的な変化の種」を蒔いたためである(同上 235)⁴¹。教皇によれば、キリスト教は物質を否定することなく、身体性は典礼行為において、その価値を全面的に認められていて、人間の身体は「聖霊の

神殿」として示され、「世の救いのために肉をお取りになつた主イエス」と結ばれているという（同上 235）⁴²。

教皇フランシスコによれば、教会のもろもろの秘跡は、「神が自然を、超自然的ないのちを仲介するものへと高め、特別に恵まれた手段」である（同上 235）⁴³。例えば、洗礼の秘跡の中で子どもの体に注がれる水は、「新しいのちのしるし」である（同上 235）⁴⁴。そして、聖体の秘跡においては、創造されたすべてのものが最も高められる。私たち人間が感覚でとらえられるような仕方では、神が自己自身を顕す恵みは、神自身が人となり、被造物のために自分自身を食べ物として与えたとき、この上ないかたちで表現された。神は「受肉の神秘の頂点において、ひとかけらの物質を通じて、わたしたちの内奥にまで達すること」を望んだと教皇フランシスコは述べる（同上 236）⁴⁵。そして、聖体において宇宙におけるすべての被造物との関係が開かれる。教皇フランシスコによれば、受肉した御子の現存する聖体は「万物のいのちの源」、「愛とくみ尽くすことので

きないいのちとがあふれ出る泉」である。全宇宙は聖体の中に現存する受肉した御子に結ばれて神に感謝をささげると教皇は述べる（同上 236）⁴⁶。そして、聖体は天と地を結び、被造界全体を抱いて貫くものとなる。聖体において被造界は神化、神との一致へ向かうように秩序付けられている。さらに聖体は私たち人間を「被造界全体の信託管理人」であるように導き、「環境への関心を照らし生かす光と力の源」でもある（同上 236）⁴⁷。

教皇フランシスコによれば、主日（日曜日）は私たち人間が神との関わり、自分自身との関わり、他者との関わり、世界との関わりを修復する日である。そして、「主日は『復活の日』、『新しい創造の『第一の日』』であり、『主の復活した人間性、全被造物の最終決定的な変容の確約』である。そして、主日は『神のもとにおける人間の永遠の休息』を告げる日」でもある（同上 237）⁴⁸。このように、キリスト教の靈性においては、休息と祝祭の価値が統合される。もしも、私たちが観想的な休息を軽視するならば、

我々の為す仕事にとつて最も大切なもの、すなわち「働くことの意味」を考慮しないことへとつながる。休息は私たちがより広い視野を持つことができるよう、私たちの目を開かせるものであり、他者の権利に改めて気づかせてくれるものである。そのため、「感謝の祭儀を中心に置く休息の日」は、「週全体を照らし、また自然や貧しい人々のことをいっそう心にかけるよう」、私たちを促すものである(同上237)。

被造物の間にある関係と三位一体

教皇フランシスコは神の三位一体と被造物との関係について以下のように考えている。御父は「あらゆるものの究極の源泉」であり、すべての存在にとって「愛と親密さの基盤」である(同上236)。⁵¹⁾ 御父は御子を通して万物を創造し、御子がマリアの胎に宿ったとき、自己自身をこの大地と固く結んだ。聖霊は御父と御子の交わりの愛そのものであり、この世界の中の天地万物の内にも働いて現存している(同上238)。⁵²⁾ 神の三位一体における父と子と聖霊

という三つのペルソナが唯一の神の本質において共に働きながら、この世界を創造した。三つのペルソナはこの共同の御業を、各々固有の仕方で行った(同上238)。⁵³⁾

教皇フランシスコによれば、すべての被造物が「三位一体的な痕跡」を自らの内にとどめている。すなわち、どのような被造物も「三位一体的な構造」を内包している(同上239)。⁵⁴⁾ 神の三位一体において、父・子・聖霊の個々のペルソナは「自存する関係」である。そして、「神をモデルにして創造された世界」は「かかわりからなる織物」である。被造物は「神へと向かうもの」であり、それゆえ、あらゆる生き物は「他のものへと向かう性質」を備えている。そこから、「被造物の間に存在する多様なつながり」を認識する。

人間の人格は、神との交わり、他者との交わり、すべての被造物との交わりを生きるために、自分自身から出て、もろもろの交わりに参与すればするほど、一層成熟し、聖化される(同上240)。⁵⁵⁾ そして、すべての被造物は創造の

際に神が刻印した「三位一体的なダイナミズム」を自分のものとする。すべてのものは関係しあっており、それが「三位一体の神秘」にもとづいた「地球規模の連帯の霊性」を育むよう私たちを促している（同上 240）。

結語

本稿の主題は、教皇フランシスコの回勅『ラウタート・シ』におけるインテグラル・エコロジーと戦争との関係について説明することであった。本論の内容をまとめて結論を述べたいと思う。インテグラル・エコロジーは「環境的、経済的、社会的なエコロジー」、「文化的なエコロジー」、「日常生活のエコロジー」という要素から構成されている。戦争はインテグラル・エコロジーが実現されていない状況の中で発生し、さらに戦争はインテグラル・エコロジーを構成する上記の諸要素をより深いレベルで、すべて否定し破壊する機能を持っている。人間存在は神との関係、人間同士の関係、他の被造物との関係の中で成立している。これ

らの関係を断絶するのが罪である。そして、戦争は神との関係、人間同士の関係、他の被造物との関係を最高度に断絶する性格を持つ。

インテグラル・エコロジーを実現して、利己主義に基づく暴力や搾取から決別するためには、私たち一人ひとりが自分自身から出て他者へと向かうことが必要である。自分自身から出て他者へ向かうことによって、他の被造物を認めて他者への配慮ができるようになる。私たちが自己自身を超え出るといふ基本的姿勢を持ち、自己閉塞性と自己中心性を否定することが、他者と環境への配慮を基本的に可能にする土台となる。それによって、神との関係における調和、人間同士の関係における調和、他の被造物との関係における調和を回復することができる。

さらに教皇フランシスコは、すべての被造物が三位一体の構造を内包していて、神の三位一体の個々のペルソナが自存する関係であるように、三位一体の痕跡を持つ一つひとつの被造物も、神へと向かい、他のものへの向かう

性質を持つていると考える。私たちが他の被造物における三位一体の構造を見出すとき、すべての被造物の間に存在する多様な関係を認識する。そして、私たち人間の人格は、神との交わり、他者との交わり、すべての被造物との交わりを生きたるために、自分自身から出て、もろもろの交わりに参与すればするほど、一層成熟して聖化される。これがインテグラル・エコロジーを実現するための基盤となっている。

つのだ・ゆういち
上智大学助教

参考文献

教皇フランシスコ『回勅 ラウダート・シー——ともに暮らす家を大切に』、瀬本正之・吉川まみ訳、カトリック中央協議会、二〇一六年。

角田佑一「教皇フランシスコ『ラウダート・シー』における三位一体の神秘——いのちの交わりとエコロジー」、片山はるひ・原敬子編著『いのちの力——教皇フラン

シスコのメッセージ』、キリスト新聞社、二〇二一年、一六二―一八四頁。

註

① 教皇フランシスコ『回勅 ラウダート・シー——ともに暮らす家を大切に』、瀬本正之・吉川まみ訳、カトリック中央協議会、二〇一六年、一二三頁。本文中、『ラウダート・シー』からの引用文には、『ラウダート・シー』の項番号を引用文末尾のカッコ内にアラビア数字で記載している。そして、尾注では、『ラウダート・シー』の日本語訳（教皇フランシスコ『回勅 ラウダート・シー』とともに暮らす家を大切に』、瀬本正之・吉川まみ訳、カトリック中央協議会、二〇一六年）の頁番号を漢数字で記載している。

- ② 同上、一二三頁。
- ③ 同上、一二四頁。
- ④ 同上、一二四頁。
- ⑤ 同上、一二四頁。
- ⑥ 同上、一二四―一二五頁。
- ⑦ 同上、一二五頁。

- ⑧ 同上、一三五頁。
- ⑨ 同上、一二八頁。
- ⑩ 同上、一二八頁。
- ⑪ 同上、一二八頁。
- ⑫ 同上、一二九頁。
- ⑬ 同上、一二九頁。
- ⑭ 同上、一二九頁。
- ⑮ 同上、一三〇頁。
- ⑯ 同上、一三四頁。
- ⑰ 同上、一三二頁。
- ⑱ 同上、一三七頁。
- ⑲ 同上、一三八頁。
- ⑳ 同上、一三八頁。
- ㉑ 同上、一三八頁。
- ㉒ 同上、一三八頁。
- ㉓ 同上、一四〇頁。
- ㉔ 同上、一四一頁。
- ㉕ 同上、一四一頁。
- ㉖ 同上、一六〇一七頁。

- ㉗ 同上、六一頁。
- ㉘ 同上、六一頁。
- ㉙ 同上、八四頁。
- ㉚ 同上、八四頁。
- ㉛ 同上、九四〇九五頁。
- ㉜ 同上、九四頁。
- ㉝ 同上、九四頁。
- ㉞ 同上、九四頁。
- ㉟ 同上、九四頁。
- ㊱ 同上、九四頁。
- ㊲ 同上、九四頁。
- ㊳ 同上、九四頁。
- ㊴ 同上、九四頁。
- ㊵ 同上、九四頁。
- ㊶ 同上、九四頁。
- ㊷ 同上、九四頁。
- ㊸ 同上、九四頁。
- ㊹ 同上、九四頁。
- ㊺ 同上、九四頁。
- ㊻ 同上、九四頁。
- ㊼ 同上、九四頁。
- ㊽ 同上、九四頁。
- ㊾ 同上、九四頁。
- ㊿ 同上、九四頁。

- ④⑥ 同上、一九九頁。
④⑦ 同上、二〇〇頁。
④⑧ 同上、二〇〇頁。
④⑨ 同上、二〇一頁。
⑤⑩ 同上、二〇一—二〇二頁。
⑤⑪ 同上、二〇二頁。
⑤⑫ 同上、二〇二頁。
⑤⑬ 同上、二〇二頁。
⑤⑭ 同上、二〇三頁。
⑤⑮ 同上、二〇三頁。

編集後記

東西宗教交流学会第四〇回学術大会は「宗教と戦争」を主題としました。

大会の日程は、以下の通り。

三月二十六日(日)

一〇時〇〇分～十二時〇〇分 第一セッション

発表者 寺沢潤世

題目 「一仏教僧のウクライナ体験―ポストソ連世界を行脚してきた遊行僧の祈りの視点から」

十三時〇〇分～一五時〇〇分 第二セッション

発表者 角田佑一

題目 「教皇フランシスコ『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジーと戦争」

十五時三十分～十七時三〇分 第三セッション

発表者 峯岸正典

題目 「戦争と平和の基盤としての個人」

ウクライナ戦争が長期化し、核戦争の可能性も否定できない危機的な状況の続く中で、第四〇回大会がZoomで開催されました。

第一セッションにウクライナから参加して下さった寺沢潤世氏の発表は、いまだ和平の目途のつかないウクライナ戦争の渦中にあって、平和のための行脚を続けてこられた貴重な体験をウクライナの西のカルパティア山脈山中に準備された道場からのビデオメッセージとして送られたものでした。日本山妙法寺を創建した藤井日達上人は、法華経信仰とガンジールの非暴力主義を実践的に結びつけることによって平和運動に邁進しましたが、その衣鉢を継ぐ寺沢潤世氏のメッセージは、単に仏教あるいは日蓮宗の信徒だけでなく、あらゆる宗教者にとって傾聴に値します。

第二セッションの角田佑一氏の提題は、ローマ教皇フランシスの回勅『ラウダート・シ』の中で示されたインテグラル・エコロジーの思想が、単なる環境危機の時代に対する処方箋だけではなく、世界平和の建設に対して重要な意味を持つことを教えてくれました。

第三セッションの提題者の峯岸正典氏は、曹洞宗僧侶としてウクライナ難民の支援に当たってこられた方ですが、今回の提題の内容は、二〇二〇年十月にバチカンの聖マリア聖堂で開催された「平和のための祈り」に参加されたときの講演と関係があります。峯岸氏は獄中で受洗した島秋人の歌集「遺愛集」の歌を引用して、掛け替えない個として生きる人間がもつ他者に向けられた深い

祈りの意味を考察しています。

環境危機と核戦争の可能性は現代世界が直面する大きな問題ですが、そのふたつの危機は、我々一人一人の生き方の問題として深いレベルで繋がっています。今回の大会では寺沢潤世氏と岸正典氏から、仏教の立場から、共に戦争の渦中にあるウクライナとフランスでの国際的な平和活動の実践を踏まえて語って頂きました。また角田佑一氏からは、キリスト教の立場から平和の使徒として世界行脚を続けておられる教皇フランシスコのラウダー・ト・シに内包される平和思想を語って頂きました。危機の時代を如何に生きるか―これは更に議論を深めていかなければならない問題となるでしょう。

東西宗教研究
第 21 号



発行日
2023 年 7 月 15 日



発行者
東西宗教交流学会
Japan Society for Buddhist-Christian Studies



発行所
南山宗教文化研究所
〒 466-8673 名古屋市昭和区山里町 18
TEL 052-832-3111
FAX 052-833-6157



